

自己標的バイアスに影響を及ぼす諸要因

堀 英太郎

問題

日々の生活の中で、他者の何でもないしぐさや言動をどのように認知するかは、その後の感情や行動に大きな影響を及ぼす。例えば教室に入った時にクラスの子が何か話している状況に出くわした時、自分の事を噂していると判断すれば、教室に入りにくくなったり他者との接触を避けたりなどの行動が取られるであろう。また、人ごみの中を歩いていて、すれちがった人とぶつかった状況に出くわした際に、その人は自分に喧嘩をうってきたからと認知すれば、怒りの感情がわき、その他者に対して攻撃を加える機会はより増えるであろう。本研究では、「日常生活での他者の何でもないしぐさや言動を、自分に対する敵意や悪意と帰属すること」を自己標的バイアスと定義し、中学生における自己標的バイアスに影響を及ぼす諸要因について検討する。

自己標的バイアスに関連すると思われる先行研究は、自己意識の関係を調べたもの (Fenigstein, 1984 : Fenigstein & Vanable, 1992)、自尊心との関係を調べたもの (池田, 1997)、攻撃性との関係を調べたもの (Dodge, 1980 : 滝村, 1991) に大別される。Fenigstein (1984) は、場面想定法による自己標的バイアス (overperception of self as a target) の質問紙を作成し、公的自己意識との関係を調べた。ここでの自己標的バイアスとは、自分に向けられたのではないかもしれない出来事に対して、自分がその出来事の対象であると過剰判断する現象である。その結果、公的自己意識が高い者ほど自己標的バイアス得点が高かった。さらに Fenigstein & Vanable (1992) は、MMPI から抜粋した全20項目なるパラノイア尺度を作成し、パラノイアと自己意識との関係を調べた。その結果、私的自己意識得点を統計的に統制した後の、パラノイア尺度得点と公的自己意識得点との偏相関は統計的に有意であった。池田 (1997) は、Fenigstein & Vanable (1992) のパラノイア尺度の日本語版と自尊心尺度を日本の大学生に施行した。その結果、両尺度得点間に有意な負の相関が見られた。この結果は、既存の自己イメージと合致する情報は受け入れられやすいので、自尊心の低い者はネガティブな情報を選択的に収集してしまい、その結果一層ネガティブな自己イメージを形成すると、Swann (1881) の自己確証理論に基づいて解釈された。Dodge (1980) は、小学生の中から教師と級友の評定に基づい

て攻撃的少年と非攻撃少年を15人ずつ選び、加害者の意図手がかりが敵意的、曖昧、好意的な欲求不満状況での攻撃反応を実験によって調べた。その結果、加害者の意図手がかりが曖昧な状況では、攻撃的な少年だけが強い攻撃反応を示した。滝村 (1991) は、パラノイド傾向を「他者に対して不適切に悪意の帰属を行なう性質」と定義し、独自に作成した青年向けのパラノイド質問紙を少年院の入所者と高校生に施行した。その結果、少年院入所者は一般の高校生に比べ高いパラノイド傾向が認められた。

しかし、①既存のパラノイア尺度 (Fenigstein & Vanable, 1992) は、「誰かが私の心の中に影響を及ぼそうとしている」など病理的な内容をかなり直接的に表現している項目が多く含まれている、②Fenigstein (1984) のいう自己標的バイアスは、行為の原因が曖昧な状況を自己に肯定的に関連づける場合も含めている、③滝村 (1991) の作成したパラノイド質問紙は、「親切な人でも、心の中では嫌々やっているとと思う」など不信感や猜疑心といった性格特性要因を測定している、④自己標的バイアスに関する研究は、大学生を対象にしたものに限られている、といった問題点が挙げられる。そこで本研究では、誰にでも見られる否定的な自己関連づけを自己標的バイアスと捉え、場面想定法による自己標的バイアス尺度を新たに作成し、中学生に施行することとした。

研究1

目的：自己標的バイアス尺度を作成し、自己標的バイアスに影響を及ぼす諸要因として他の構成概念（私的・公的自己意識、自尊心、不信感）との関係を検討する。自己標的バイアスは、公的自己意識、不信感と正の相関、私的自己意識と無相関、自尊心と負の相関を持つと予測される。また、自己標的バイアスとSCTによるセルフイメージ、PFスタディによる攻撃性との関係についても検討する。自己標的バイアスは、ネガティブセルフイメージ、他責型と正の相関を持つと予測される。

方法：質問紙法による調査を実施。被調査者は中学生222名（男子108名、女子114名）測定尺度：独自に作成した自己標的バイアス尺度、自己意識尺度 (大淵, 1991)、自尊心尺度 (星野, 1970)、不信尺度 (天貝, 1995)、SCT10文 (①私は②私の顔は③私は昔④私は今⑤私は将

来⑥私を不安にするのは⑦私が好きなのは⑧私が努力しているのは⑨私の友達は⑩私の両親は), PF スタディ 4 場面 (①お誕生日に呼んであげないわよ②おまえは弱虫だ③あなたは遅刻です④僕が勝ったよ。みな僕のものだ)

結果と考察: 自己標的バイアス尺度の因子分析の結果, 自己標的バイアス因子と非自己標的バイアス因子の 2 因子性が認められた。自己標的バイアスと公的・私的自己意識との間に有意な正の相関が見られた。また分散分析を行なった結果, 公的自己意識の主効果が有意となった。この結果から, 公的・私的両側面において自己意識の強い者は自己標的バイアスが見られやすいが, 特に他者の評価を気にするなど自己の公的側面に意識の強い者はその傾向が強いことが示された。また重回帰分析の結果, 男子では自己標的バイアスと公的自己意識との関係が深い, 女子では私的自己意識との関係が深かった。これは, 女子においては他者の事を意識している者は自分の内的側面にも目をむけやすく, また他者の目をよりネガティブに捉えているためであると解釈された。自己標的バイアスと自尊心との間に負の相関が, 不信感の間に正の相関が見られた。さらに SCT によるネガティブセルフイメージとの間に正の相関が, ニュートラルセルフイメージとの間に負の相関が見られた。人は自分に対する見方をもとに他者を判断する。従って, 自尊心の低い者は, 行為の原因が曖昧な状況において, ネガティブな情報を選択的に収集してしまい, 他者の否定的評価に目がいきやすくなる。そのため他者が自分に対して行なう言動を敵意や悪意として受け取ったり, 対人場面に対して不安を覚えやすくなり, その対人不安に伴って評価懸念が高まり自己標的バイアスが生じると思われた。自己標的バイアスと他責型との間に, 有意な正の相関が見られた。欲求不満状況において他者に責任を求める傾向が強い者は, 他者への悪意の知覚をしやすいたことが示された。

研究 2

目的: 一般中学生の中で自己標的バイアスが高かった者と低かった者について, SCT と PF スタディの質的データを検討し, 研究 1 の結果と比較することを目的とする。

方法: 研究 1 で行なった一般中学生 222 名の調査の中から, 自己標的バイアス得点が高かった者, 低かった者, 男女それぞれ上位 10 名を抽出し, 各群の SCT10 文, PF スタディ 4 場面の質的データを検討する。

結果と考察: 自己標的バイアス高群では男女ともに, 「私は…」 「私の顔は…」 でネガティブな記述が多い, 他責型の者が多い, といった特徴が見られ, 研究 1 の結果を概ね支持していた。さらに, 「私の将来は…」 といった未来に対するセルフイメージでネガティブな記述が多い, 「私を不安にするものは…」 で, 周りの人の噂話, かげでこそこそする事など対人関係の不安に関する記述が多い, といった特徴も見られた。自己標的バイアス低群では, 男女差がかなり顕著に現われた。セルフイメージや友達・両親イメージに関して, 男子ではニュートラルな記述が多いのに対して, 女子ではポジティブな記述が多かった。また「私を不安にするものは…」 では, 男子では天災, 地震など自己統制不可能なものの記述が多いのに対して, 女子では対人関係に関するものの記述が多かった。さらに男子では他責型の者が半数ほど見られたのに対して, 女子では自責型の者が多かった。欲求不満場面に対して他者に責めを求めやすい者, 対人不安傾向の強い者の中には, むしろ極端に悪意の帰属を避ける者も存在する可能性が示唆された。

総合的考察

研究 1, 研究 2 を通して, 中学生の自己評的バイアスに影響を及ぼす諸要因について検討した。本研究では, 他者への悪意の知覚は, 妄想といった病理現象だけでなく一般の人にも起こりうる現象であり, 中学生といった思春期前期においても見られることが明らかになった。また, 自己標的バイアスは公的自己意識, セルフイメージ, 攻撃性などの要因と関係していることが示された。今後, 自己標的バイアスといった認知判断がどのような感情, 行動を導くかといったメカニズムを検討する事, 自己標的バイアス発生の状況要因について検討する事は, 中学生の攻撃行動や引きこもりなどを理解するための有効な手がかりを与えられる。